

## 精神分析について、あらゆる方々がお知りになりたいこと、すべてについて

(翻訳 山崎篤 日本精神分析協会 精神分析的な精神療法家研修生)

イタリア人として初めてIPA会長に選ばれたStefano Bologniniにインタビューする機会があり、精神分析について、これまで聞くことがなかったものの、ずっと私が知りたかったことについてたずねてみました。

人々はよく「私は今、分析を受けている...」と言いますが、本当のところは単に心理療法を始めたということが多いようです。心理療法と精神分析の根本的違いについて教えてください。

その違いは、まさに、共に生活している人とお互いに週一度会う人との違いにほかなりません。精神分析では、(椅子の代わりにカウチを使うという)治療的設定に加えて、週に何度行うのかという頻度が、こころの探索を行っていく上での深さと、分析家と患者との情緒的な結びつきに寄与しています。精神分析を受けるということは、「精神的に共同生活を送る」ことと同義なのです。

精神分析学は一つの人文科学上の学問、すなわち人間の精神機能のあらゆる側面に関する心理学的諸理論を組み合わせたもののようなものであると思います。しかし精神分析は、本来的には心理治療の一つであります。純粋に知的な冒険や学習経験を目的として、精神分析を受けることに意味があると思われませんか。

30年前、多くの知識人が、自らの変化を通して癒しを得るためというよりも、自らの内的世界を豊かなものにするために精神分析を受けました。たいていの場合少なくとも部分的には、彼らはそのような知的作業が防衛であることを発見することになりました。現在は、このようなことはなされておられません。精神分析を受けることは、経済的な負担をもたらしますが、過去においてはそれが今よりも負担感が少ない時代があったのでしょうか。今や人々は、「自分自身をからかう」ようなことは減っています。人々は自らの関心事、すなわち苦悩やニーズといった中核的なことへと、すぐに話題が向かうようです。

精神分析においては、こころは道徳を凌駕すると考えられています。精神分析家は、良し悪しの判断をしないという傾向があるようです。イタリアでは、Flaianoが言ったように、精神分析家である我々には唯一敵と言えるものがあるとのこと。「それはサッカー試合の審判員である。なぜなら、彼らは常にジャッジを下すからである」。このように精神分析は我々が何らかの責任を負うことを免除するderesponsibilizeでしょうか。

倒錯という文脈から言いますと、善悪を混同することは患者を混乱させ、それらの基本的区別についての患者の内的接触を失わせるために、戦略的に実行されるものと言えるでし

よう。精神分析の技法は、患者の連想に期待して「判断の停止 suspension」を促します。患者が彼ら自身の内的生活の探求に向けて彼ら自身を開かれた状態になすためには、偏ることなく注意深く連想を聞かれていると実感する必要があります。しかしながら上に述べたような善悪の混同が、よこしまな目的をもってなされるのであれば、その分析家はまずこのこと全てに関する力動を明らかにしなくてはなりません。精神分析では患者に意識的な責任性を引き受けるように求めます。これは例えば、もし彼らがそれを実行に移さないのであれば、その患者は彼らの抑圧されるかまたは意識上にある欲動に関しては「無罪」です。しかし彼らはそれに対して「責任はある」と考えるのです。彼らが精神分析を通じて成熟するにつれて、彼らはそれらの欲動の存在や意味について理解するようになります。彼らは彼らの敵を殺してしまいたいと望むかもしれません（我々分析家は、彼らがどう感じ、どのような空想をもつのか「決める」ことはできません）。しかし彼らは自らの責任のもとに、そうしないべきなのです。

精神分析を受ける時、我々はそれぞれが世界の中心にいるようなスリル感を体験します。精神分析家は我々の存在をまさに自分の物語として語らずにはいられなくしてしまいます。このことは、精神分析には人々のナルシズムを満足させてしまうという危険があることを意味していないでしょうか。

そうです。しかし多くの例では、これが、患者たちのニードをいささか控えめに発達させるものであることなのは確かなことです。ナルシストの世話をするのではないほとんどの例では、むしろこのことは、人々（もしくは彼らの内的部分）に価値と自己の感覚とをもたらします。というのも彼らは、自身の発達を通して受容的なコンテイナーがいなかったのですから。それで、このような例と比較して、実際のところまさにナルシストである人たちがいます。彼らは精神分析の技法によって、全く反対の反応をこうむるでしょう。その技法とは、彼らに自身の振る舞いについて気づかせ、それを変容していくことを狙ったものです。

私は決して精神分析を受けようとは思いません。というのも私は分析家との不公平な関係性について疑念を抱いているからです。彼らは「当たり前であることのように」彼らの権威を濫用する傾向があるようです。

分析家と患者の関係性は対等ではありませんし、そうはなりえないし、そのようなものにするべきでもありません。というのも、患者と行う仕事に関して基本的な、そして機能上の責任を負っているのは分析家なのですから。とはいえ、人間というレベルではこの二人、すなわち分析家と患者は完全に対等です。彼らは 2 人の人間であるのだし、お互いをそのようなものとして取り扱わなければならないのです。

系統だったやり方で、精神的な関係性が展開する経過の中で起こることが、数世紀に

わたり標準的に起こって来ましたし、「喜びを伴う自発性を伴い、献身と愛着とから」(Adorno)、セッションを重ねるための「工夫」や礼拝への必要もなく、生じてきました。フロイトの時代以前の人々の人間性が、実際のところそんなに悪いものだったのでしょうか。

精神分析が適正に行われる場合、その個人に対して彼らが成長するために必要とするものを提供するための方法に焦点を当てていますし、自覚的でもあります。深みと共感とをもって他の人々と関係を持つそのやり方を心得ている多くの人々がいます。それは尊い天性の資質だといえるでしょう。しかし精神分析的に行う共感というものは、それらの人々が行うものとは技術的には別のものなのです。実際のところ、我々が行う共感は、技術的な複雑さをはらみもつものです。例えば、その患者のなかの互いにちぐはぐな異なる部分、全く同じ人に対して全く同時に向けられてしまう愛と憎しみのようなもの…それぞれに対してチューニングしていくことなどを行っていきます。

精神分析のほかにも苦悩を処理していく方法はあるのでしょうか。例えばダンスとかはどうでしょう。(精神分析家の Elvio Fachinelli がかつて私に話してくれたようにですが)あります。事例によって異なりますが、大いに人々の助けとなる方法があります。しかしながら、それらは精神分析とは異なって、より限局された影響しか与えないのです。しばしば表面的でさえあります。それらの活動は有益ではありますが、真に人格の構造に永続的などという意味での変容をもたらすものであることはまれです。

今日のセラピストたちの中には、無意識の概念はほとんど無効だと考える人がいます。つまり、人は何を抑圧したり、なかったことにしたりはしないというのです。(超自我は我々に何も禁止しないし、一方で我々が何事かにふけるように後押しすることもしない。なぜならば、我々の直面している事態は、コンシューマリズム：消費者主義の拡大にこそあるからです)。すなわち我々の問題というのは、いかに「我々を解放するか」ではなく、いかに次第に脆弱化する自我を強化するかにあるというわけです。

そうですね、それは正しいと思います。無意識がもうもはや全く存在していないという意味ではなく、抑圧が弱まったという意味で、中心的自我は弱くなり、断片化し混乱しています。過去においては、人々は圧倒的な超自我から自由になることを求めていました。一方で今日においては、人々は信頼のおける(人々、そして関係性という意味で)「対象」を見出すために、そして常識的で継続性のある関係性を築くことができるようになるために、再統合されることを望んでいます。現代人は、あなたが考えるほど以上にしばしば傲岸ですし、混乱し、実を言えば貧窮しているのです。